

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 鈴木 聖子

田辺尚雄(1883-1984)は日本音楽史および東洋音楽史研究の祖として知られ、雅楽の無形文化財指定など、文化行政にも大きな影響力を発揮した人物である。近年では、とりわけ戦時期の国家主義との結びつきなどが批判されることも多いが、その議論は一面的なものになりがちで、彼の活動や音楽観がトータルに検証される機会は少なかった。本論文は、多作で知られる田辺(本論文末尾につけられた「記事・論文目録」には大小合わせて2000点以上がおさめられている)による様々なテキストの徹底的な読解をふまえ、「科学」としての音楽研究の確立という一貫した方向性を軸に、田辺の明治期から第二次大戦後にまで及ぶ活動を捉え直すことで、日本音楽研究の歴史に新たな視界を提供するものである。

本論は全4部、10章からなる。第1部「日本音楽研究の黎明：『日本音階』の発見」では、日本音楽の近代化、改良という国家的要請を受けた音階研究の系譜の中での、物理学を専攻した田辺による音響物理学的な展開が、西洋の「科学」としての音楽学の状況と深く関わっていたことが明らかにされる。第2部「進化論と音楽史」では、田辺がやはり同時代の西洋から音楽史に対する進化論的な見方を取り入れ、応用することで、日本固有の音楽でありつつも、他の文化の音楽を融合しつつ発展するという形で、日本文化の優秀性を証す独自の説明方式を開拓したこと、そのための最適のモデルとして雅楽が選ばれ、それが、今日にまでつながる、雅楽の独特な表象を形作ったことが論じられる。さらに第3部「田辺尚雄の『東洋音楽理論ノ科学的研究』においては、正倉院収蔵楽器の調査や、台湾、沖縄、樺太などの「外地」への調査旅行といった1920年代の「科学」的研究活動を通じて、田辺が雅楽を軸とした自らの日本音楽史観を東洋音楽史観にまで拡大していった経緯が、そして第4部「民族主義と国際主義のあいだで」においては、田辺のこのような音楽史観が戦時期には大東亜共栄圏的な方向性と結びついた一方で、戦後にはほとんど同じ構図のまま文化国家としての日本の将来像を支えるものにもなっていたことが論じられている。

本論文の最大の特徴は、田辺の膨大なテキストを精査し、内容だけでなく用語法やロジック、さらには背景的文化状況まで視野に入れた「厚い記述」がなされている点にある。

「科学」という軸を抽出してきた骨太な議論も、そうした徹底した読解の産物であるが、他方で、彼の中で音楽が、「美容」、「粋」、「家庭」といった意外な要素と結びついて表象されていたさまが描き出されるかと思えば、田辺が好んで用いたレコードというメディアの役割や、彼の活動に見られる戦前と戦後の連続性に光が当てられるなど、その議論はきわめて多面的な広がりをもち、日本音楽や東洋音楽の研究はもとより、他の多くの研究分野にとっても展開が期待できるような様々な問題提起がなされている。

記述がやや田辺寄りに傾きすぎ、同時代の他の立場や動向との擦り合わせなどが疎かになったといった問題点も残るが、得られたものの価値に比べれば大きな瑕疵とは言い難い。以上のことをふまえ、本審査委員会は本論文を、博士(文学)の学位を授与するにふさわしいと認定するものである。